5/7
安

4/24
(8885文字)

梶矢　文昭さんの被爆体験伝承講話

第12期生　大石　秀邦

私は被爆体験伝承者の大石秀邦と申します。講話は約45分、残りの時間で皆さんからの質問や感想にお応えできればと思います。本日は次のような流れでお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

これは（1945年8月6日午前8時15分）、広島に原子爆弾が投下された日付と時刻です。私たちの人生には、後から考えてみれば偶然だったり、運命的であったりする出来事がつきものかもしれません。投下から43秒後にさく裂をしたとされる原爆ですが、1分という時間にも一秒一秒の積み重ねがあり、そのわずか数秒の差が生死を左右したという事実も、被爆者である梶矢文昭さんの体験をもとにお話しをさせていただきたいと思います。

まずは「原子爆弾の被害の概要」についてです。今から（79）年前の1945年8月6日、現在のJR芸備線矢賀駅の上空約9,600メートルを飛行するアメリカ軍の爆撃機B29（通称：エノラ・ゲイ号）から投下された一発の原子爆弾（通称：リトルボーイ）は、広島市の中心部、現在の島内科医院の上空600メートルでさく裂しました。なぜ、広島に投下されたのでしょうか。

中国山地に源を発する太田川下流域のデルタ（三角州）上に形成された広島市は、平野部への出口の西と東に小高い山が、南側には河口そして瀬戸内海が広がっています。市中心部から半径約3キロメートルの範囲内に建物の85パーセントが収まるという特徴を持っていました。それは、世界で初めて投下される原子爆弾の破壊力（エネルギー）や効果を測るうえで、広島市の地理が適していたと考えられます。また、1894年の日清戦争をきっかけに「軍都」として発展した広島（廣島）には、軍事関連の施設が多く、アメリカをはじめとする連合国の捕虜収容施設がなかったことなども、最終的に広島が第1投下目標となった理由とされています。

1945年当時の広島市の居住人口は28～29万人で、その他、周辺郡部からの通勤者、火災の延焼を防ぐために建物を壊す作業（「建物疎開」）などに勤労動員された大人や学生、また軍需工場などに徴用された朝鮮人労働者。さらに、軍人や軍関係者、留学生や捕虜などを合わせると、原爆投下時の広島市内には約35万人前後の人がいたと推計されています。

運命の8月6日、原爆が投下される午前8時15分までを振り返ってみましょう。原子爆弾（リトルボーイ）を搭載したエノラ・ゲイ号が科学観測機と写真撮影機を伴い、広島から約2,740キロメートル離れた太平洋のテニアン島の基地を離陸したのは日本時間の午前1時45分でした。それらに先立って九州の豊後水道方面から、米軍

諸説あるとは思いますが、資料館の展示[1]ではこの内容は触れていないので「地形」が適していると判断された、ということに留めるのが良いと思います。

の気象観測機三機のうち一機が広島県の上空へ飛来したため、午前7時9分に警戒警報が発令されました。「広島の天候は良好で爆撃可能」とエノラ・ゲイ号に伝えた気象観測機はそのまま広島上空から飛び去り、午前7時31分に警戒警報は解除。無警戒に近い日常の生活が始まりました。その後、午前8時6分に福山市の上空、そして8時15分には東広島市の上空を越えて西へと進むエノラ・ゲイ号を含んだ大型機3機が発見されていました。しかし、市民への警戒警報の発令には至らず、世界初の原子爆弾は、広島市中心部に向けて投下され、その43秒後にさく裂したのでした。

広島に投下された原爆は、ウラン235の原子核が連鎖的に分裂をするときに発生する巨大なエネルギーを利用したもので、爆発に伴って放出された「熱線」「爆風」そして「放射線」が複雑に作用し、人体や構造物に大きな被害をもたらしました。市街地のほぼ中央部上空で爆発したため、被害は同心円状に全市に広がりました。爆心地から半径2キロメートル以内の建物はことごとく倒壊・焼失、そして1945年12月末までに約14万人（誤差±1万人）の人々が原爆を原因として亡くなったと推計されています。

原爆のさく裂によって放出された「熱線」「爆風」「放射線」の威力について、順に見ていきましょう。

まずは「熱線」です。原子爆弾のさく裂によって生じた「火の球」の表面温度は、約0.2秒後にセ氏7,700度に達したと推定されています。ちなみに太陽の表面温度は約6,000度です。まるで小さな太陽が地上わずか600メートルの上空に突如現れたようでした。熱線を浴びた爆心地周辺の地表面の温度は3,000から4,000度に達したといわれており、爆心地から1.2キロメートル以内で、さえぎるものがないまま熱線を直接受けた人は身体の内部組織にまで大きな障害を負い、そのほとんどが即死または数日以内に亡くなりました。また、爆心地から半径3.5キロメートルまでの地域にいた人も、素肌の部分に火傷を負いました。鉄の溶け始める温度は約1,500度といわれており、原子爆弾が放出した熱線のすさまじさがわかります。

次に「爆風」です。原子爆弾は空中でさく裂した直後に高温・高圧の空気の壁といえる「衝撃波」を発生させました。その「衝撃波」の後ろから吹き抜ける爆風の風速は爆心地から100メートルの場所で毎秒約280メートル（ちなみに新幹線の秒速は約70m)、その圧力は爆心地から500メートルのところでは1平方メートルあたり約11トンに達したと言われています。爆風で吹き飛ばされた人、倒壊した建物の下敷きになって圧死した人、下敷きのまま火災で焼け死んだ人も多くいました。また、割れて飛び散ったガラス片などが突き刺さり、大きな破片によって血管や神経を損傷することもありました。原子爆弾が放出した総エネルギーを100%とすると「爆風」はその半分の約50%と言われており、その影響力の大きさが伺えます。

そして、火薬を使った爆弾と原子爆弾の決定的な違いが「放射線」の放出です。さく裂から１分以内に放出された放射線を「初期放射線」とよび、そのうち中性子線とガンマ線が地上に到達し、直接、人体に大きな影響を及ぼしました。また、放射線を浴びた土や金属はそれ自体が放射性物質となり、巻き上げられたチリやススなどの降下物とともに「残留放射線」を放出しました。放射線は、体の奥深く細胞にまで入り込み、白血球や赤血球の減少など血液の異常を引き起こし、骨髄など血液を造る機能を破壊しました。また、肺や肝臓等の内臓を侵すなど深刻な障害も引き起こしました。爆心地から約１キロメートル以内で、さえぎるものがないまま原子爆弾の初期放射線を浴びた人は、致命的な影響を受け、その多くは数日のうちに死亡しました。

被爆直後から短期間のうちにあらわれた「熱線」「爆風」「放射線」などを原因とする一連の症状を「急性障害」といい、外傷や火傷以外に発熱・吐き気・下痢・出血・脱毛・倦怠感など、様々な症状が現れました。「急性障害」はその年の 12 月末までにほぼ終息をしましたが、「放射線」による影響はその後も長期にわたって様々な障害を引き起こし、被爆者にとってその危険性は現在も続いています。２歳の時に被爆した佐々木禎子さんと「折り鶴」の実話については皆さんもご存知だと思いますが、禎子さんは、被爆から９年後にあたる 12 歳（小学校６年生）の時に急性骨髄性白血病を発症。「折り鶴」へ託した願いもむなしくその翌年の 1955 年に亡くなりました。

原子爆弾の恐ろしさの一端についてお伝えしましたが、今から（79）年前それは確かに存在しました。

さく裂した世界初の原子爆弾。その中を生き延びた人々や焼け野原となった広島市内へ捜索や救援で入った人々は、何を体験し、何を思い、そして何を考えたのでしょうか。今日はそのお一人である梶矢文昭さんの被爆体験についてお伝えしたいと思います。

梶矢さんは、1939（昭和 14）年３月生まれの（85）歳。被爆当時は６歳で、現在のマツダスタジアムに近い荒神町国民学校の１年生でした。ご両親そして二歳上のお姉さんらとともに広島駅の近くで暮らしていました。当時、都市部の小学生は、空襲から若い生命を守ること、そして、素早い避難や防火などを目的に、より安全な地域に一時的に移住をさせました。これを「学童疎開」とよんでいます。「学童疎開」には３年生から６年生の児童を学校ごとに避難させる「集団疎開」や個人的に親戚や縁者などに引き受けてもらう「縁故疎開」などがありました。一方、中学校や女学校などの生徒は「学徒勤労動員」に駆り出されました。原子爆弾の投下当日には約 8,200 人の生徒（主に１年生）が、戸外で、火災の延焼を防ぐために家屋を解体して空き地を作る「建物疎開」の作業などに従事していました。梶矢さんのお姉さんである小学校３年生の文子さんは、新学期に入り、お母さんの実家があった現在の北広島町へ「縁

故疎開」をしていました。しかし、原爆投下前には訳あって自宅に戻っており、弟の文昭くんとともに自宅近くの大須賀分散授業所に通っていました。分散授業所とは、次第に激しくなる空襲から児童を守るため、より自宅に近い民家などに設けられた臨時の授業所のことです。

ここからは、皆さんも、6歳の文昭くんの気持ちになって、その体験談を受け止めてもらえればと思います。

運命の8月6日朝、警戒警報解除の通報を受け、きょうだいはお母さんに見送られ、爆心地から1.8キロメートルの距離にあった大須賀分散授業所に出向き、朝の掃除に取りかかりました。原子爆弾のさく裂直前、文昭くんは玄関付近に、そして、お姉さんの文子さんはバケツの水換えのため、奥の台所へと向かっていました。どちらが水を換えに行くか、事前に少し言い争いになりました。そのわずか数秒の屋内での移動が二人にとっての生死の分かれ目でした。何かの気配を感じた文昭くんは、掃除の手を止めて南側の庭に目をやりました。その時「ピカーッ」の閃光を感じ、庭の八手の葉が真っ黒に溶けるのが見えました。直後に「ドゥーン」という爆風におそわれ、授業所の家屋は一瞬にして倒壊。きょうだいは柱や土壁の下敷きになりました。暗闇と恐怖のなか、助けに来てくれる人もなく、文昭くんはしばらく身動きをせずにじっと耐えていました。次第に破れた屋根から外の光が漏れてくると、その方向をめざして死に物狂いで柱や土壁をくぐり抜け、崩れた屋根の上へやっと這い上がりました。その時の土壁やわらの腐ったような匂いは今でも覚えているそうです。目の前にはすでに被災した人々が列をなして避難しており、文昭くんもその列に加わり、ただただ、夢中で、がれきの道を裸足で逃げました。「1年生の6歳で、自分なりによう逃げたもんじゃと思います」と梶矢さんは当時を振り返って話されます。

広島駅の西側付近から饒津神社横の京橋川沿いの道に出た時、川岸には数えきれない被災者を、そして川面を漂う多くの死体を目の当たりにしました。また、対岸の白島方面には炎が上がっていました。見知らぬ大人たちについて懸命に避難を続けた文昭くんは、神社を越えて二葉山の中腹までたどりつきました。そこから見下ろすと広島市内は全面火の海となっていました。

夕方になって炎が衰えを見せると、避難していた人々は山を下り始めました。文昭くんも近所のおばさんに連れられて山を下り、家族が生きていれば避難しているであろうと思われる東練兵場（陸軍の演習場）へと向かいました。その途中でおばさんとはぐれてしまい、不安や恐怖のなか、一人になってお父さんやお母さんを探してさまよっていると、別の近所のおじさんが見つけてくれ、家族が避難している場所まで連れて行ってもらいました。やっとのことで再会ができたお母さんの片目にはガラス片が突き刺さり、顔はガラスによる切り傷で血まみれで、その場にうずくまりながら「う

ーん、うーん」と呻いていました。そのお母さんの前には、今朝、分散授業所で一緒に掃除をしていた文子さんの遺体が横たえられていました。文子さんは、分散授業所の台所付近で崩れた柱に胸を挟まれ、ほぼ即死の状態だったそうですが、分散授業所が炎上する前に、お父さんによって連れ出され、重い傷を負ったお母さんとともに広島東照宮と東練兵場が接する付近へと避難していました。予期せぬ、そして残酷な死にもかかわらず、お姉さんの表情にはかすかな「ほほ笑み」が浮かんでいるように、幼かった文昭くんには見えました。その「ほほ笑み」は、梶矢さんご自身が年齢を重ねる中で「謎」の一つとして心に残り続けました。

梶矢さん家族は、「水を、水をくれ」という被災した人の呻き声が響き、多くの死体が横たわる地獄のような東練兵場で三日間を野宿で過ごしました。時に、救援隊や軍から、おにぎりや乾パンの差し入れがあったそうですが、悲惨な状況にもかかわらず、「整然とならんで受け取る被災者の姿や乾パンの袋に残っていた金平糖の甘さが印象に残っている」と梶矢さんは話されます。その後、迎えに来てくれた親戚と一緒に母の実家へ避難し、しばらくそこで生活することになりました。親戚とはいえ、原子爆弾や放射線に関する知識が十分でなかった当時、「原爆症は感染する」といった偏見などで、納屋にムシロを敷いただけの厳しい生活が続きました。

その後、避難先の母の実家から広島市内へもどり、焼け跡に建てた小屋からの再出発となりました。再開した小学校はいわゆる「青空教室」で、進学した中学校には未だ校舎は無く、遠方の中学校への通学を余儀なくされたそうです。梶矢家は経済的には苦しい状況だったそうですが、ご両親やきょうだいの支えによって、梶矢さんは高校・大学へと進学し、1952（昭和37）年に小学校の教員になられました。

原爆で大けがを負いながらもお母さんは94歳まで生き抜かれました。それでも毎年8月6日がやって来ると、お母さんは泣きながら手を合わせて拝んでいたそうです。仕事に就いた梶矢さんが30歳になった頃、あまりに「めそめそ」するお母さんの姿を見かねて、「お母さん、ええかげんにせいや、幾ら泣いたって死んだ者が生き返ることがなかろうがい」と叱りつけたことがありました。そうすると、お母さんは梶矢さんにお姉さんのことを話してくれました。それは、3年生になったお姉さんが「縁故疎開」で親戚の家に預かってもらっていた時のことでした。お母さんが着替えなどを持って実家を訪ねた際、お姉さんは「私も連れて帰って、連れて帰ってぇーや」とお母さんのそばを離れませんでした。お母さんは何度も「だめ、だめよ」と言って諭しました。何とかお姉さんを説得してお母さんだけを乗せた帰りのバスが走り出すと、お姉さんは懸命にバスを追いかけてきたと言うのです。その必死な姿を見たお母さんは、バスを停めてもらい、お姉さんを迎え入れました。お母さんにすがりついたお姉さんは「うちゃ死んでもええ、死んでもええけんお母さんと一緒がええ」と泣きじゃ

くりました。さすがにお母さんも「ようわかった。死ぬときは一緒に死のうね」と連れて帰ったのです。バスの中で安心して寝込んだ顔と原爆で死んでいった時の顔が「いっしょじゃった」とお母さんは話してくれました。安全な疎開先から連れて帰ったことで、結果的に娘を死なせてしまったことに対し、お母さんは自分自身を責め、悔い続けていたのでした。

木造の住宅内で被爆した人は、爆風による倒壊で押しつぶされて亡くなったり、建物の下敷きで身動きが出来ないまま、その後に発生した火災で焼け死ぬ人も多くいたこと、また、梶矢さんきょうだいの生死を分けたのは屋内の居場所だったことは先ほど話しました。ここからは、梶矢さんの被爆体験のお話にいつも登場する原民喜、そして私の父の被爆体験を加えてお話をさせていただきます。広島市出身の詩人で小説家の原民喜は、病気で妻を亡くした翌年、40歳の時に、爆心地から約1.2キロメートルの距離にあった自宅の便所内で被爆をしました。その後、倒壊を免れた便所から自力で脱出し、迫りくる猛火の中を多くの被災者らとともに広島東照宮へと避難しました。その場所で、目の当たりにした被爆の悲惨な様子を手帳に記すとともに「コハ 今後生キノビテ コノ有様ヲツタヘヨト 天ノ命ナランカ」（これは、今後も生き延びてこの悲惨な状況を伝えなさいという天の命令ではないだろうか）との生きる意欲や決意を綴り、後にその体験を小説「夏の花」として発表しました。しかし、1951（昭和26）年に46歳の若さでその生涯を終えてしまいました。被爆者そして表現者として、生きることや心身の健康にどのような不安があったのかはわかりません。それでも、私たちは、残された彼の作品などで被爆の実相や苦悩に近づくことができます。梶矢さんは、被爆体験の講話に臨まれる際には、原民喜の「コハ 今後生キノビテ コノ有様ヲツタヘヨト 天ノ命ナランカ」の言葉を思い起こしているそうです。

正門付近に

一方、私の父である大石正文も同じく爆心地から1.2キロメートル、現在の縮景園内にあった家の中で被爆しました。父は当時14歳で、広島商業学校（現 広島商業高等学校）の3年生。8月6日の月曜日は工場が休みで、学徒動員先（日本製鋼所）へは行かず、いつもより遅い朝食をとっていたときに被爆。勝手口の方向へ飛ばされた体は、上り口の四角い空間にすっぽりと納まったそうです。その段差で体は守られ、倒壊した家屋から自力で脱出することができました。外にいた叔母さんは、熱線で背中から手足の裏全体に火傷を負い、爆風に吹き飛ばされて頭に重傷（8月18日死亡）を負いました。火災による嵐や竜巻が発生するなか、父は重症の叔母らと川を渡り、避難所の東練兵場を経由して約4キロメートル先の親戚宅にたどり着きました。翌日、汽車と徒歩で実家へ帰宅した後、放射線の初期症状だったのでしょうか、数週間、高熱と扁桃腺の炎症に苦しみますが、次第に健康を回復していきました。

父は、自分自身の被爆体験について何かに書き記すとか筋道をたてて話をするとい

うことはほとんど無く、時々、酔いに任せて経験をしゃべり、「人間の人生はそんなもんじゃないんじゃ」と一方的に愚痴をこぼすぐらいでした。父は 2007（平成 19）年に肺癌で亡くなり、すでに（17）年が経過しています。「伝えてはみたいが、文字や言葉では語れない。できるなら思い出したくない、忘れてしまいたい」といった複雑な感情を抱えていたのではないかと私は思います。また、「被爆者健康手帳」は知り合いの方の勧めで、1969（昭和 44）年、38 歳の時に取得しますが、どこか後ろめたい気持ちを持っていたように私には思えました。

人にはそれぞれの生き方や在り方そして考え方があるように、被爆体験者にもそれぞれの思いや苦悩そして願いがあると思います。もちろん、被爆体験者である梶矢文昭さん、原民喜、父の三者に面識はなく、年齢や立場も異なる存在ですが、京橋川を挟んで比較的近い場所で被爆し、たまたま、倒壊した家屋から自力で脱出できたこと、そして避難したルートやその途上で目の当たりにしたであろう被爆の惨状には重なるところが多くあると思っています。

最後に「ヒロシマをつなぐ」というテーマでお話をさせていただきます。梶矢さんは、1990 年代の中ごろまで、教師として被爆体験を語ることはあまりなかったそうですが、校長となられた 1994 年頃から自らの被爆体験を語る機会が少しずつ増えていったそうです。小学校の低学年にも関心を持たせるために自ら絵を描いて、紙芝居風にして伝えるような工夫や改善を重ねて来られました。また、退職後は「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を組織し、伝承活動を継続的に取り組んで来られました。さらに、2020 年から広島平和文化センターの被爆体験証言者となられ、自ら証言活動を続けられるとともに被爆体験伝承者の養成にも力を尽くしておられます。

梶矢さんはいつも被爆証言の最後に「三度目は許しちゃいけんのです」「平和は尊いぞ」と強く訴えられます。「広島・長崎に続く原爆投下は絶対にあってはならない」との思いや願いこそが、梶矢さんご自身の証言活動そして伝承者の養成活動を支えておられます。

現在、世界には（12,512）発の核弾頭（爆弾）が存在し、実際に配備されている数は（3,804）発といわれています。また、核分裂による原子爆弾に対し、核融合による水素爆弾などの威力は最大で広島型原爆の約 1000 倍ともいわれています。予想される被害の大きさから「使えない兵器」ではあっても、それを持つことで攻められないといった「核抑止論」が核保有国の考え方になっています。さらに、2022 年のロシア・ウクライナ紛争や 2023 年のイスラエル・パレスチナ（ハマス）紛争以降、劣化ウラン弾の使用や小型核など「使える核兵器」の議論が度々聞かれるようになっています。核兵器の開発や保有はもちろん、それによる威嚇（脅し）や援助も禁止する「核兵器禁止条約」が成立した一方で、最近の核兵器をめぐる国際情勢はたいへん厳しい

状況にあるといえます。

多発する国家や民族の対立によって、核兵器廃絶への道は困難を極めていますが、あらためて私たちは、(79) 年前の被爆の実相に深く学び、原爆投下に至ってしまった歴史やその背景を正しく知ること。さらに、被爆体験者の願いを聴き、受け止め、それらを色々な方法で継続的に伝えていく活動こそが最も強い「抑止力」であること、また一般市民を巻き添えにする戦争や武力での対立に勝者などはいないということをけっして忘れてはならないと思います。そして、私たちにできることを少しでも行動に移していくことが、被爆者の願いに応えていくことになると思います。

最後になりましたが、私たちの現在や未来は、天災や自然の力に対して無力な面もあり、時に「運命」として受け入れなければならないこともあるのかもしれません。しかし、核兵器の保有や使用、また、その前にある武力対立は「運命」ではなく「人為」であり「人災」です。絶対に避けねばなりませんし、避けることはできるはずです。

以上で私からのお話は終了させていただきます。何か質問や疑問がありましたらお願いします。

本日は被爆体験伝承講話にご参加いただきありがとうございました。